

道徳における表層メッセージと深層メッセージ

二六

村島義彦

はじめに

教職課程における「道徳教育の研究」を担当して、かなりの歳月が流れた。その間に、講じられる中身の基本線もおのずと定まって、今では、宗教と対比させて道徳を浮き彫りにする方向で、「宗教と道徳の異同」「道徳の核にあるもの」「道徳における二つのゴール」をめぐる一連の流れを俯瞰的に辿った総論部と、最初の「異同」と最後の「ゴール」をめぐる具体的問題に踏み込んだ各論部が、そもそもの展開の大きな二本柱となっている。こうした二本柱を何度も往復する中で、改めて思われたのは、講じる中身の基本線にブレやズレのないかぎり、しかも、講じる当人の積極的関心が褪せないかぎり、講義そのものは、聴く側にまさる恩恵を、むしろ語る側に与えてくれる点であった。一人で黙々と、特定のテーマをめぐって自己との対話（＝思索）を繰り返すよりは、あえて学生の前に、対話自体のあらましを披露（＝講義）する方が、そこでの反応を契機に、思わぬ閃きや盲点の気付きに出会う確率もいっそう高いのは否めない。わたしの場合も、むしろ例外ではなかった。語るに足る（？）収穫の一つは「宗教と道徳の異同」を各論的・具体的に展開していた中で得られた。すなわち、双方における同の面として導き出された「説かれる中身の基本線＝Quality of Life（生き方の質）」の具体例に「感謝・反省・謙虚の実践」をはじめ込んで、道徳ではなぜ、こうした三

徳が積極的に推奨されるかの理由を改めて問い質す中で、ある知見が、はからずも頭を掠めたのだった。簡単に紹介すると、道徳では一般に、「飽くを知らない」よりは「足るを知る」を、「ネガティブ思考」よりは「ポジティブ思考」を、「征服」よりは「共生」を、という風に、一見したところ、後者のグループのみがことさら評価を受けているように映るけれども、少し掘り下げると、この片寄りはいささか、人間の宿業ともいべき生来の身勝手を念頭に置いて、これに根ざした特定方向への生理的片寄りを見据えつつ、その是正を図って、あえて逆方向への片寄りを人間的な課題として訴える形で、つまりは、双方の力動的なバランス（ないしハーモニー）が力説されているにすぎない、とでも記述できるだろうか。道徳における表層メッセージは、直接の形で言表される各種の教えや戒めであるけれども、その深層メッセージは、直接に言表された教えや戒めとは逆方向の中身と、そうした前者の精妙なバランスなのだ、というわけである。当たり前といえば当たり前なこの理解は、しかし、（わたし自身の経験に照らしても）盲点ながら、そう広く行き渡っているとはみなしがたい。授業における学生たちの反応——襟を正した聞き耳と好奇の眼差し——も、これを間接に裏付けてくれた。そうした全体に促され、有名な「コロンプスの卵」とまでは行かないだろうが、改めて、これへの注意を喚起するのも無駄ではあるまいと考え、いくつかの具体例に訴えて、裏書きの汗を流してみたい。

なお、ここに紹介するのは、授業で展開した実際の中身に、新たな事例（プラトンの「正義論」など）を加味しつつ、改めてまとめ直したものである。構成の全体は、次のようになるだろうか。

第一章 感謝・反省・謙虚の三徳はどう関係するか

- ・ 三徳が推奨される理由
- ・ 三徳はどう関係するか

第二章 人間に内在する二つの方向性

- ・ 「飽くを知らぬ」と「足るを知る」
- ・ ポジティブ思考とネガティブ思考

第三章 バランスの勧め

- ・ 魂の健康としての正義

第一章 感謝・反省・謙虚の三徳はどう関係するか

道徳においては、われわれ人間が「関係的存在」と捉えられた上で、そもそもの関係のできる限りの良好化に資するさまざまな徳目がさまざまに掲げられている^①。というのも、この世に人間が一人しかいないとすれば、孤島のロビンソン・クルーソーさながら、やりたい時に・やりたい処で・やりたい事を・やりたい分量だけぐしたとしても、誰にも迷惑は掛からないから咎められもしないだろうが、周囲にはしかし、他の人間が数多くいて、われわれの個人的行為は、何らかの程度、こうした連中に影響を及ぼさないでは済まないからである。小石を投じた波紋が当人以上に及ぶのなら、小石を投じるに先だって、波紋の及ぶ範囲内の人たちから一応の了解を取らなくてはならない。いやしくも集団で生き

道徳における表層メッセージと深層メッセージ

る以上、これは、最低限度の基本ルールなのである。こうしたルールの基本性は、たとえば、「人からされて嫌だと思うことは、人にするのを慎むべきである」という、孔子が口にしたネガティブな戒め（『論語』衛霊公・第十五の二四など）としても、あるいは、「人からされて嬉しいと思うことは、人に向けてどんどんすべきである」という、イエスが口にされたポジティブな戒め（マタイ伝・第七章十二など）としても、十分に確認されるにちがいない。この種のルールは、人間関係の良好化に大きく焦点づけられているため、その延長上には、あるいは隣人愛、仁や恕（衛霊公・第十五の二四）、誠ないし思無邪（為政・第二の二）など、さまざまな道徳的徳目がそれぞれに座を占めている。広く人口に膾炙した「感謝」「反省」「謙虚」の三徳も、やはり、こうしたグループに属する有力なメンバーにちがいない。

三徳が推奨される理由

ではなぜ、感謝・反省・謙虚の三徳が、人間関係の良好化に資するわけでも有力なメンバーとして広く登録されているのだろうか。問わずもがなのこの問いを、今、愚直を承知であえて問うてみよう。その場合、こう切り込めばどうかだろうか。ここにいう感謝・反省・謙虚の三者が、徳目として積極的に推奨されるのであれば、その対極に位置する三者は、逆に、好ましくない悪徳として忌避されるべきだけれども、そうした三者として、そもそも何が特定されるのだろうか、とである。

この場合、「ありがたいな」と深く感謝する態度の対極には、「まことにけしからん、どうなっているのだ」と膨れっ面で漏らす不平（ないし不満）が、そして、腰の低い謙虚の姿勢の対極には、ひたすら鼻の高い傲慢（ないし慢心）が、それぞれ容易に位置づくにちがいない。しかるに、反省の対極については、それほど容易に事は運ばない。ここにいう

反省の中身をどう捉えるかに、まず、考察の目を向けなくてはならないからである。世の反省は一般に、「深く反省して」心の底から悔い改めて、あるいは「反省が足りない」自らの非を認める素直な態度に欠ける」などの用例も示すように、おしなべて後悔（ないし懺悔）に近い意味で用いられている。これを踏襲すれば、反省の対極には、そうした悔悟を著しく欠いた思いがり（ないし独りよがり）が位置づくのだが、これは果たして正しいのかどうか。今、ここでの「反省」を英語に置き換えると、いわゆる「reflection」が導き出されてくるのだが、この「レフレクション」はしかし、世にいう後悔や懺悔に等置されるわけではなく、まず第一に「反射」を、次いで「反映」を、そして第三に「内省」を意味した。反射にせよ、反映にせよ、その本質は、物事のありのままの映し出しにあった。この線上に置かれた内省も、深く事態を省みてそのあるがままを捉えること、に当の本質を求めなくてはならない。反省はだから、あるがままの自分を虚心に眺めること、に等置されてよいのである。醒めた自己凝視を介して、普段は気にも止めずに看過していた自分の実態がまざまざと目に映り、その結果、浮かび上がった欠点の数々が改めて自覚された場合には、素直な後悔（や懺悔）がおのずと湧き出てくるだろうし、逆に、浮かび上がった長所の数々が改めて自覚された場合には、心からの誇り（や自負の念）がおのずと湧き出てくるだろう。後悔にしても誇りにしても、方向を異にした反省の結果にすぎない。だとすると、醒めた自己凝視を本分とした反省の対極には、果たして何が位置づくのだろうか。それは、のぼせ上がった自己への暗盲を本分とする以上、おそらく、世にいう頑迷固陋にちがいない。

このように、世にいう感謝・反省・謙虚の姿勢の対極には、世にいう不平・頑固・傲慢の姿勢が位置づくとして、われわれがもし、後者を一週間ばかり、ひたすら互いに心掛けるならばどうか。わずかの感謝、わ

ずかの反省、わずかの謙虚も頑なに拒むあり方からは、普段以上にギクシャクした、数々の摩擦に溢れた耐え難い人間関係が間違いなく導き出されてくるにちがいない。この点は、あえて我が身で実験しなくとも、世の体験的事実として誰にも十分に了解されるのではないだろうか。ならば逆に、われわれ自身が、前者を一週間ばかり、ひたすら互いに心掛けるなら、そこからは、普段以上にスムーズな、まことに居心地のよい、豊かな寛ぎに満ちた好ましい人間関係が導き出されてくるのも、やはり、世の体験的事実として十分に了解されるにちがいない。ならばこそ、この世にあるかぎり、どんなに足掻いても数々の人間関係から足抜きできないわれわれにとつて、当の関係の中身を、ギクシャクからスムーズに向けて少しでも移行させるべく、不平・頑固・傲慢に代わって感謝・反省・謙虚の三者が、ひたすら訴えられたのであった。

ところで、感謝・反省・謙虚の三つは、個々別々によりは、三点セットの形でこれまで一括して掲げられてきたけれども、この点について、もし誰かがこう問い掛けたらどうだろうか。わたしは、反省と謙虚はともかく、感謝のみは性に合わないのだ、これを抜いて、前の二つに焦点を絞ってはいけないでしょうか、と。こうした問いは、さまざまな人のさまざまな好みを考えると、一見、ありそうにも思われる。だが、この問いが何を含意しているかに思いを及ぼすなら、そう気安く、「ありそうにも思われる」などと相槌は打てないにちがいない。ここでの問いには、感謝・反省・謙虚の三徳が、それぞれに中身を違えた、別種の、互いに独立した個々の徳目であるのか、それとも、異なっているのは名称のみで、実体においては等しく、まさに三位一体の形をなしているのか、をめぐると一つの解答が密かに含まれていたからである。すなわち、三徳の相互関係が、ここでは、暗々裡に前者の姿で想定されていたのだった。この場合、ここでの配置をいじって、「感謝と謙虚はともかく、反省の

みは」としても、「感謝と反省はともかく、謙虚のみは」としても、問いの本質は変わらない。

三徳はどう関係するか

ならば、感謝・反省・謙虚の三徳は、本当のところ、どのように関係するのだろうか。まったくの個々別々と考えるべきなのか、それとも、いわゆる三位一体と捉えるべきなのか。この点を特定しようとするれば、三徳から任意のいずれかを選んで、その中身を追究していった時、これが果たして、他の二つにおのずと繋がっていくのか否か、を見定めなくてはならない。ともあれ反省を選んで、この点を眺めてみると——先にも指摘したように、反省自体は、あるがままの自分を虚心に眺めるといふ、醒めた自己凝視をそもその本質としていた。ここでの自己凝視が徳として強調されるのは、普段の日常生活で、これに代わった自己への暗盲が執拗に座を占めているからに他ならない。たとえば、普通の人生を三十年ばかり経てきた者なら、人からいまだしてもらっていない事と、すでにしてもらった事の全体的な比率が、ほぼ半々に達しているのではないだろうか。著しく恵まれた者なら、比率の針は心持ち後者に傾き、著しく不遇な者なら、その針は心持ち前者に傾くだろうが、ほとんどの場合、針の傾きの平衡は否定できないはずである。にもかかわらず、人間が具える生来の身勝手に支えられて、いまだしてもらっていない事は、常時、驚くほど克明に記憶されているのに対して、すでにしてもらった事は、それほど克明に記憶されているわけではない。だから、普通の日常を普通に生きるかぎり、われわれの胸には、してもらっていない事の数々が思い浮かんで、さまざまの不平・不満・不服が次々と口をつくのである。これはしかし、大人気ない我がままと咎めるよりは、むしろ自然な事態と素直に了解すべきかもしれない。「あれもまだだ、これもま

まだ、それもまだだ……」と実感されながら、それでいてなお、正当(?)ともいふべき不平を押しさえつつ、逆の感謝をあえて口にすべき謂われなど、およそないからである。そしてもらっていないという事実立脚した不平は、どう考えても、心理的にまっとうとみる他はない。とはいえ、ここでの不平が立脚するそもその事実——してもらっていない——は、果たして本当にまっとうなのだろうか。

就寝前の一刻、虚心に一日の出来事をふり返るなら、慌ただしい真昼の流れの中で(見栄と衒いに纏いつかれた昼の目には)見えなかった光景が、改めて浮かび上がってくるにちがいない。人間の宿業ともいふべき身勝手から、常に意識の前面に顔を覗かせる。いまだしてもらっていない事の数々に加えて、これほど常に意識化されているわけではない。一つの、すずでにしてもらった事の数々が思い出されて、ほとんど前者一色に染め上げられた昼の光景が、両者の混交を介して、全体的には後者に向けて色調を変えるからである。すなわち、ひたすら正当に意識化されていた前者の列に、新たに意識化されて正当な地位を取り戻した後者が迎え入れられて、元々からの双方のバランスが正当に自覚された結果、前者に由来する不平という黒色に、後者に由来する感謝という白色が混入され、その全体が、黒から灰色に——つまりは白に向けた黒の希薄化に——移行したのであった。このように、本当の意味での反省は、黒に彩られがちな世界に、白を混入させ、そもその全体を灰色に導くのが通例である。反省を介して、黒に彩られがちな世界が、いつそう黒の度合いを深めたり、あるいは、白に染められていた世界が、黒の混入によって、つまりは灰色に移行した例など、果たして耳にした試しがあるだろうか。人間に刻み込まれた生来の身勝手に根深さを考えると、こうしたケースは皆無に近いと思わざるを得ない。つまりところ反省は、基本的に、不平から感謝への方向を辿らせるのである。

さらに、人間における今一つの身勝手も取り上げてみよう。われわれは総じて、人にしてやった事々の数々は驚くほど詳細に覚えているのに、他方、人からしてもらった事々の数々は、それほど鮮明に覚えているわけではない。いわゆる「貸し」の項目と「借り」の項目では、記憶に留まる鮮度が著しく異なっているからである。まるで悪気はないのだが、金銭にせよ事物にせよ恩義にせよ、おしなべて借りた事柄の数々は、貸した事柄の数々に比べて、記憶に留まる鮮度が極端に薄いようだ。「何と打算的な……」と嫌気が走るかもしれないが、元々、人間はそう出来ているのかも知れない。であるなら、日常の意識に上るのは、「借り」でなく「貸し」の数々である以上、この貸しに支えられて、貸し手である自分が誇らしく思われないはずはない。この誇らしさを露骨に顔に出そうと、そつと胸にしまい込もうと、世話される側でなく世話する側に身を置いた自分に、おのずと鼻が高くなるのは否めない。これはしかし、貸しの数々が隠れもない事実である以上、ごく自然な人情と考えるほかはない。要するに、常日頃の生活では、人間の身勝手に支えられて、世話される側に立った腰の低さよりは、世話する側に立った鼻の高さが——それゆえ謙虚よりは傲慢が——、ひたすら幅を利かせ勝ちなのである。

けれども就寝前の一刻、虚心に一日の出来事をふり返るなら、常に意識に上っていたとしてやった事々の数々に加えて、これほど鮮明に意識されていなかった今一つのとしてもらった事々の数々が、改めて浮かび上がってくるにちがいない。まっとうな人生を歩んでいるかぎり、人様のお世話をした「貸し」に劣らず、人様からお世話いただいた「借り」の方も、半々に近い形で見られないのは不自然だからである。お世話を受けた借りについては、おのずと腰も低くなり、いうところの謙虚が我が身に醸し出されてくる。これが自然の人情だとすると、先に同じく、

ここでも反省を介して、生活の中での具体的な貸しに立脚した、その意味ではまことに正当な鼻の高さがないし傲慢に、生活の中での具体的な借りに立脚した、やはり正当な腰の低さがないし謙虚が混入して、とどのつまりは、傲慢という黒に謙虚という白が交じって、そもその全体がかなり灰色がかかることになる。ここにいう灰色は、つまりは黒の薄まりであり、それだけ白に向けた接近の進んだことを意味するだろう。このように、人間に宿った根深い身勝手を念頭に置かなら、反省という行為は、日頃の傲慢を強めたり、数少ない謙虚を減らすよりは、基本的に、傲慢から謙虚への方向を辿らせると考えないわけにはいかない。

このように反省は、本気でされるかぎり、他方における感謝と謙虚を導くのだが、逆に、こうも言えないだろうか。もし仮に、感謝の日々を送っている者がいるなら、当人は、おのずからの反省を介して、すでにもらった事々の数々を意識化し、これらを、いまだしてもらっていない事々の数々に交ぜ入れているからこそ、双方がほぼ半々という基本事実立って、不平に片寄らない感謝の生活を営んでいられるのだ、と。というのも、反省を介して把握された前者の割合が、後者に比べて著しく低いといった異常事態の中で、それでもあえて感謝を表明するなど、およそ不可能に近いからである。これは同じく、謙虚にも当てはまるにちがいない。すなわち、もし仮に、謙虚を絵に描いたような者がいるなら、当人は、おのずからの反省を介して、お世話いただいた「借り」の数々を意識化し、これらを、お世話した「貸し」の数々に交ぜ入れているからこそ、双方がほぼ半々という基本事実立って、傲慢に片寄らない謙虚の生活を営んでいられるのだ、と。われわれの人情から考えて、どう計算しても世話を受けた借りの数よりも、世話をした貸しの数が極端に多いとすれば、それでもあえて腰の低い謙虚な人間など、かえって不自然で薄気味も悪いからである。

第二章 人間に内在する二つの方向性

これまでの考察から、感謝・反省・謙虚の三徳は、あくまでも三位一体の関係にあつて、その実体を同じくしながら単に名称を違えるのみ、という点が基本的には確認されたにちがいない。と同時に、人間には度し難い身勝手が具わつていて、すでにしてもらつた事とまだまだしてもらつていない事をめぐつて、さらには、お世話いただいた事とお世話した事をめぐつて、後者の記憶は常に驚くほど鮮明なのに、前者の記憶は、どういふわけが、これほど鮮明とは言いがたい点も改めて確認されたにちがいない。この点はしかし、さしたる悪気があるわけではなく、人間なるがゆえの基本的習性と考えた方がよさそうである。こうした人間理解に立つと、驚くほど根深い人間の身勝手そのものは、人間に関わる教説——わけでも道徳——の展開において、不可避の前提条件に組み込まれないわけにはいかない。人間存在の赤裸々な現状に足場を置かないで、人間に関わる教説など、とうてい生産的に論じがたいからである。そこで今、ここに焦点づけて、世の道徳が共有するであろう一般的特徴を、次のように仮定してみよう。すなわち、道徳では、あるがままの事実を捉える主体の側での無意識の片寄りが、避け難い人間的現実として一応は認定された上で、その是正に向けて、あえて逆方向の片寄りが積極的^①に訴えられているけれども、これ自体は方便にすぎず、本当のところは、あるがままの事実があるがままに（＝どちらにも片寄らないで）捉える^②まっとうさが訴えられているのみなのだ、と。

それでは、ここに仮定した中身を、道徳の世界で広く推奨される「自

道徳における表層メッセージと深層メッセージ

足の姿勢」と「ポジティブ思考」の中に簡単に跡付けてみよう。

「飽くを知らぬ」と「足るを知る」

妙心寺の数ある塔頭の一つに属する竜安寺は、虎の子渡しの石庭で全国に知られているけれども、われわれがもし、岩と砂と土塀が奏でる枯山水の妙を堪能したのち、さらに足を裏庭にも延ばすと、そこに、水戸光圀が寄贈したと伝えられる白状の石が、樹々と苔の中にそつと据えられているのを目にするにちがいない。よく見れば、石の中央には四角い穴が穿たれ、四囲には、北側に「五」、東側に「佳」、南側に「止」、西側に「矢」と読める文字らしきものが刻まれている。禅宗特有の機知を盛り込んだこの判じ物は、ところで、何を告げているのだろうか。これを読み解くには、東西南北の文字らしきものに、中央の四角い穴を加え、四つの漢字を作り上げなくてはならない。すなわち、「五」と「口」を合体させて「吾」、「佳」と「口」を合体させて「唯」、「止」と「口」を合体させて「足」、「矢」と「口」を合体させて「知」といふ風に漢字を作成するなら、その全体は、時計回りに「吾唯足知（吾レ唯ダ足ルヲ知ル）」と読み解けるのではないだろうか。簡素を絵に描いた裏庭の一角でこれを目にする、無駄を排した禅寺の静寂に支えられてか、「足るを知る」というセリフが、驚くほど素直に心の奥まで染み込んでくるのは否めない。そして、密かに思うのである。これは実に、竜安寺そのものが、ひたすら急ぎのリズムを刻み続けるわれわれの日常に対して、その「飽くを知らない」姿勢に反省を促すべく、あえて逆の「足るを知る」姿勢への注意を喚起しているのだな、と。

ここに訴えられている自足の姿勢は、それゆえ、これのみで積極的な意味をもつというよりは、対極に位置する今一つの姿勢とセットになつて、はじめて本当の意味をもつといえるだろう。試みに今、「足るを知

る」姿勢を、そこでの抑制機能に着目してブレーキ一般に、「飽くを知らない」姿勢を、そこでの駆動機能に着目してエンジン一般になぞらえるなら、マイカーを例に取るまでもなく、およそブレーキを欠いた車で、果たしてどれだけのアクセルを踏み込めるだろうか。危険に際して急ブレーキを踏めないのであれば、いつ出会うか判然としない危険にそなえて、いつでも停止可能なスピードしか出せないの言うまでもない。エンジンの性能をフルに活かして存分にスピードを楽しむなど、望むべくもないのである。その逆に、高性能のエンジンを搭載せず、いつでも停止可能なスピードしか出ないのであれば、あえてブレーキも必要ないだろう。幼児の三輪車、少年の自転車、青年の大型バイクを思い浮かべただけで、この点は、容易に裏書きできるからである。エンジン（駆動機能）は、ブレーキ（抑制機能）を伴ってはじめて持てる力を十分に發揮できるし、ブレーキも、高性能のエンジンを欠くなら無用の置物に留まるほかはない。

「足るを知る」姿勢と「飽くを知らない」姿勢は、車におけるブレーキとエンジンの関係さながら、いずれを欠いても、等しく他方は十全に機能しない共存の関係を保っている。この関係は、「古今を通して過らない」基本の真実であるのだが、われわれの日常を眺めるかぎり、後者の一方的な優位に揺らぐ気配はほとんど感じられない。そうした優位の原因を辿ると、苛酷な自然界での数多の生存競争を逞しく生き抜いた過程で、個々人の核の部分のおのずと刻み込まれた「more and more（より以上に・さらに以上に）」の習性に、あるいは行き着くのかも知れないが、この習性はしかし、科学技術の爆発的な躍進を背景とした高度産業社会に身を置くわれわれの日常を介して、ひたむきな強化の道を歩みつつある。思うに、妥協のない効率化の推進など、「高度産業社会」を代表する文句のない指標にちがいない。もっとも、高度産業社会が追い求め

たのは、われわれの生活手段の全般に及ぶ効率化であった。生それ自体の効率化ではなかったのである。けれども、効率化された生活手段の数々に囲まれ、その恵沢を十二分に享受する中で、他でもない「効率化」の発想が、生活手段のレベルを超えて、生それ自体にまで及ぶのにさほど時間はかからなかった。たとえば今日、各分野での生活手段の効率化を介して捻出された時間的余裕（ないし余暇）は、元々、生活の充実に資するべく捻出されたはずなのに、用いられるに際して、あるうことか効率のリズムに従っている。というのも、われわれの「余暇 (leisure)」を振り返っても明らかのように、それは、「仕事 (labour)」の対極に位置し、それゆえ、レイバーの世界の基調である「効率」とは別個のリズムを刻むべきものであった。レジヤの生命は、あまねく効率の縛りを解かれた点に、当の効率を超え出た点に求められた。にもかかわらず今日のレジヤは、「来るべき五月の連休を、できるだけ娯楽を満載して、どれだけ効率よく過ごせるか、そのスケジュールを緻密に練らなくてはならない」といった巷の声にも代表されるように、明らかに、レイバーのリズムを基調に仰いでいるからである。そもその基調をレイバーに仰ぐ以上、そうしたレジヤは、実体的にレイバーの延長上にあると考えないわけにはいかない。効率のリズムの無意識の刻み込みを介した世のレジヤのレイバー化―こうした現実は、基本的に否定しがたいのである。

およそこのように、「レイバーの効率化」が「レジヤの効率化」にまで飛び火し、おしなべて「手段の効率化」が「目的の効率化」にまで及んだ今日の奇妙な状況は、古人の目にはおそらく、「ミイラ盗りがミイラに成り果てた」皮肉な典型例と映ったにちがいない。そうした古人の目を恥じる暇もなく、われわれは、時間の点では「より早く」を、分量の点では「より多く」を、値段の点では「より安く」を、ひたむきに追求

して止まない。まさに「more and more」と形容される他にないこのスタイルはしかし、否定すべき負の推力というよりは、事の全体に着目して、まっとうな正の推力として積極的に評価されなくてはならない。これの過剰が招き寄せる弊害の数々に目を奪われて、当のスタイルまで否定するのは、まさに行き過ぎ以外の何ものでもないからである。この点には、抑え切れなく「more and more」に促されて、これまで、いかに多くの成果が——物心の両面に互って——築き上げられてきたかを簡単に振り返るだけでも、十分に了解されるにちがいない。内なる「more and more」は、われわれ人間に必須の力なのである。とはいえそれは、本来の必要性があえて声高に訴えられなくとも、誰もが、溢れる程に装備し溢れる程に発揮しているから、どこからも声高に当の必要性は訴えられなかった。しかるに、これとは逆の自足の姿勢は、今の時代にそぐわないのか、ほとんどの人の関心の外にあつて顧みられないから、さまざまな形で、積極的に注意が喚起されたのであつた。こうした事情は、T・カーライルの「反・自覚論」（と高坂正顕が命名したところのもの）を彷彿させるにちがいない。^④この論は、われわれが胃腸の存在を意識するのは、それらが、何らかの異常を訴えた時であつて、もっぱら健全な状態であれば、ほとんど意識されないのである。という形で、積極的な訴えの対象は、それ自体の目下の不十分を物語っていて、逆に、訴えの対象から除外されているなら、目下の十分性を無言で物語っている、と囁きかけているのだから、ここでのメッセージの見事な代弁と位置づけられてよいからである。

ポジティブ思考とネガティブ思考

さらに今一つ、広く世の肯定を確保しつつある「ポジティブ思考」にも、吟味の目を向けてみよう。その場合、ここでのポジティブ思考はそ

もそも、当の中身をどうイメージされるべきなのか。ともあれ、われわれの日常に目を向けると、そこには「プラス思考」と「マイナス思考」の名で呼ばれる思考様式が目に見えるにちがいない。たとえば、真夏の夕刻のビアガーデンで、満々と注がれて白い泡を湛えた大ジョッキを片手に、大のビール好きが舌をなめているとしよう。待ち切れなくてジョッキに口をつけたところ、あまりの美味さにグイグイとあおり、我に返ると、ジョッキの中身はすでに半分であつた。よく目にされる光景であるが、その際、当の本人はどう反応するか。「しまった、もう半分も無くなった。もっと大事に飲むべきであつたのに……」というのが偽らざる気持ちにちがいない。ビール好きなら等しく共有できるこの気持は、しかし、ジョッキの中身が真半分という客観的事実を、それと意識しないで特定方向から眺めた結果、おのずと導き出された嘆きであつた。半分という事実が、この場合、飲み干されて無くなった空の部分に目を向けて捉えられていたからである。間違つてはいないものの、これのみがしかし、捉え方のすべてというわけではない。半分という事実は、飲み干されずビールに満たされた充の部分についても、等しく妥当するからである。今、虚から充に目を転じるなら、溜め息と軽い後悔に満ちた先のセリフは、おそらく、「もうけた、まだ半分も残っている。まだまだ楽しめそうだな……」という、喜びと舌なめずりのセリフに置き換わるにちがいない。二つのセリフは、各々が事実裏書きされ、それぞれに真つ当といえるのだが、この場合、前者のケースは「マイナス思考」と命名され、後者のケースは「プラス思考」と命名されるのが、世の通例である。

そうした命名はしかし、通例ではあつても、いささか妥当性に欠けるのではないだろうか。ここに用いられた「プラス」や「マイナス」には、暗々裡に価値的なイメージが纏いついて、前者はあくまでも好ましく、

後者はあくまでも好ましくない、といった暗黙の評価を引きずらざるを得ないからである。二つの思考様式はしかし、一方がひたすら好ましく、他方はひたすら好ましくない、といった固定の価値づけに唯々諾々と従うわけではなく、この点に配慮すると、ここでの「プラス」と「マイナス」は、むしろ「ポジティブ」と「ネガティブ」に置き換えられるべきかもしれない。こうすると、双方の差も、単なるポジ（陽）とネガ（陰）の差となつて、置かれた実状にいつそう沿うだろうからである。

ネガティブ思考とポジティブ思考の実際は、このように、ビールジョッキの飲み干しに託して端的に浮き彫り化できるのだが、これに類した逸話は、少し昔に目をやっても、いくつか発見できるにちがいない。たとえば、寺院の説教僧が好んで披露する「婆さんと二人の息子」の物語も、そうした一つであるだろう。すなわち——昔々ある処に、一人の老婆が、二人の息子と暮らしていた。息子たちはそれぞれ、一方（A）が履物屋を、他方（B）が傘屋を営んでいたが、ある雨の昼下がり、くだんの老婆の家の前を、顔なじみの坊さんが通りかかったところ、どうしたわけか、老婆はシクシクと泣いていた。不審に思つて理由をたずねると、これだけ雨が降れば、息子（A）の履物屋を訪れる客もなく、息子はきつと、恨めしそうに空を仰いで深い溜め息をついているだろうと考へると、悲しくて涙が止まらないとのことであつた。なるほどお気の毒に、という言葉を残して、坊さんは、老婆の家を後にしたのだが、その翌日、空は嘘のように晴れ渡つた。これなら、老婆のニコニコ顔を楽しめるだろうと考へ、坊さんは、あえて老婆の家まで足を延ばしたところ、予想に反して、老婆はシクシクと泣いていた。合点が行かず訳をたずねると、これだけ晴れ渡れば、息子（B）の傘屋を訪れる客もなく、息子はきつと、恨めしそうに空を仰いで深い溜め息をついているだろうと考へると、悲しくて涙が止まらないとのことであつた。なるほどお気の毒

に、と一応は慰めの言葉をかけながら、坊さんはしかし、老婆にこう説教した。雨の日には息子（A）の商売を思い浮かべ、晴れの日には息子（B）の商売を思い浮かべて、かれらの落胆ぶりに涙するのは、実の親として当然の情であるけれども、眺める相手を少しズラせてはどうだろうか。すなわち、雨の日には、浮かべる息子の顔を今の（A）から（B）に、晴れの日には、今の（B）から（A）に変えるのみで、目下の嘆き一色の世界は、ガラリーと一変しないわけにはいかない。雨の日の息子（B）は、商売の傘が売れに売れ、満面に笑みを浮かべるだろうし、晴れの日の息子（A）も、商売の履物が売れに売れ、同じく満面に笑みを浮かべるだろうから、いずれにしても母親は、かれらの喜びを投影して、ニコニコ顔を押し殺すことはできないだろうから、と。天候を問わない泣き面か、それとも逆の喜色満面か——これを決定づけたのは、いずれの場合にいずれの息子に目を注いだか、の一点であつた。シビアな現実を考えると、二人の息子が双方とも同時にひたすら笑い、老婆も、心置きなくニコニコできる僥倖はまず考えられないし、逆に、二人の息子が双方とも同時にひたすら嘆き、老婆も、心底からシクシクに浸る奈落もやはり希有であるうから、要は、現実が具えるネガの局面にのみ目を固定しないで、必要に応じてポジの局面に目を転じるだけの、切り替えの自由をできるだけ確保しておく日頃の訓練が強く求められるわけである。

ここに紹介した老婆のシクシク顔が「ネガティブ思考」を代表し、他方のニコニコ顔が「ポジティブ思考」を代表するのは、改めて断るまでもない。加えて、そうしたシクシク顔とニコニコ顔が、単なるネガとポジの差に留まつて、これを越えた価値の差にまで及ばない点も、同じく言を待たないにちがいない。考へてもみて欲しい。老婆の喜色満面は、物事の好ましい面のみをもつぱらに眺めるポジの姿勢が招く必然の結果

であり、その泣き面は、逆に、物事の好ましくない面のみをもつばらに眺めるネガの姿勢が招く必然の結果であったのだが、そうしたポジの姿勢は、果たして、これのみで本当に十分といえるのかどうか。われわれの実人生が、さまざまな明と暗、表と裏、光と陰を巧みに配した一枚の綾錦に似た様相を呈している以上、あえて一方（明・表・光）のみを意図的に拾い上げるポジの姿勢は、方便ならともかく、ひたすら固執された場合には、人生の半面しか捉えない気楽な能天気性を厳しく諷らねざるを得ないだろう。この姿勢が積極的な意味をもつのは、ひとえに、他方におけるネガの姿勢の先天的な執拗さが強く意識されたことだったからである。ポジにせよネガにせよ、いずれも事実の半面を正しく踏まえ、まっとう性の点で差のない以上、いかに考えても、単に片方のみで十分というはずはありえない。

第三章 バランスの勧め

このように、大きく方向を異にした二つの内なる傾向性をめぐって、いずれの市民権も等しく認めつつ、そうした生来の持ち駒を共に活かすべく、双方の力動的なバランス（ないしハーモニー）を可能なかぎり心掛ける、という基本姿勢は、さまざまな用語で、さまざまなコンテクストに位置づけて、これまでも繰り返し訴えられてきたのだが、そうした代表格の一つは、おそらく、道徳思想史上に名高いプラトンの「正義」論であるだろう。そこでは、正義の本質をひたすら内なる三つの能力の機能的なバランスに求める形で、これまでにもみたバランス主体論が、さまざまな迫力を湛えて、壮大かつ緻密に展開されていたからである。そうした中身のいかにあるかを、ともあれ、かれ自身の主著『国家』に眺めてみよう。

魂の健康としての正義

プラトンの『国家』では、副題（「正義について」）も示すように、終始一貫、「正義に徹する人の生涯は、果たして、それ自体において文句のない得々とみなしうるか」の問いが徹底して問われているのだが、その大筋と要点は、以下のようになるだろうか。すなわち——ソクラテスはまず、問われている「正義は、それ自体において得であるか否か」の究明に先立って、さらに究明されるべき事柄が一つある、と指摘する。他でもない、「正義とはそもそもいかなるものか」の問いがそれであった。われわれは、或るモノの正体を不明なままに放置して、これの得ないし損を論じることができない。こうして、自らを正義の探求に焦点づけたソクラテスは、次いで、こう考えた。正義の正体を解き明かすには、ともかく、人間の魂をつぶさに分析しなくてはならない、と。世にいう正義は、勇氣・節制・知恵等々と同じく、人間の魂に関する徳目の一つであったからである。ここには、貴重な手掛かりが二つ目にされるだろう。すなわち、人間の魂と徳目であるが、前者の内には、三匹の生きものが巣くっていた。計算し・比較し・秤量するはたらき一般を司る、われわれの理知の部分に相当する「賢者」と、意気に燃え、胸の高鳴りに自らを委ねて憚らない、われわれの俠気ないし気概の部分に相当する「獅子」と、ありとあらゆる欲望・欲念・欲情が、無数の鎌首をもたげて不気味にうごめく——その意味ではヤマタノオロチに形容されてよい——、われわれの欲動一般に相当する「ヒュードラ」（海龍）である。こうした内なる住民の各々に、「知恵」「勇氣」「節制」といった三つの徳目がキッチリと対応していた。

ここで注意を促しておきたいのは、ギリシアにおいて、徳目を意味す

る「アレテー」は、何らかの戒律や規範をひたすら遵守して、いささかの違反もない状態といったものよりはむしろ、自らに具わった特性を最高に発揮して、最も見事に輝き渡っている状態として常にイメーじされていた点である。これに関しては、競走馬のアレテーは、出場したレースのすべてを征することであり、盗賊のアレテーは、目ぼしいすべてを奪いながら断じて捕縛されないことだ、などの例話からも十分に裏付けられるにちがいない。そうしたアレテー観を先の三者に当てはめるなら、「賢者」がまさに賢者として最も光り輝いている状態、つまりは賢者の徳が「知恵」となり、「獅子」がまさに獅子として最も光り輝いている状態、つまりは獅子の徳が「勇気」となり、「ヒュードラ」がまさにヒュードラとして最も効果的に自らのヒュードラ性を実現している状態、つまりはヒュードラの徳が「節制」となる——というのも、欲がまさに欲として実を結ぶには、偶発的な時々の欲に身を任せるといった、いわゆる「放縦」に訴えて叶うはずもなく、逆に、こうした欲をコントロールする何らかの自主的操作としての「節制」が要求されなくてはならないからである——のは、ほぼ明らかであるだろう。このように、「知恵」「勇気」「節制」の三徳については、母体となる能力を「理知」「気概」「欲望」といった魂の三部分に割り振ることができるのだが、では、肝心の「正義」について、われわれはどこに当の母体を求めればよいのか。魂の内には、座ないし能力は三つしかない。とすれば正義は、母体を欠いた単なる幻影にすぎないのか。

こうしたアポリア（袋小路）に直面したソクラテスは、探求の便宜上、ミクロコスモス（小宇宙）としての「人間」から目を転じて、マクロコスモス（大宇宙）としての「国家」に焦点を合わせた。「人間」と「国家」がミクロ（小）とマクロ（大）の違いこそあれ、コスモス（宇宙秩序体）という点を共有する以上、「人間」の徳としての正義も、当然

「国家」の内に認められるだろうし、「国家」という巨大な獵場では、正義の捕獲もいっそう容易になるだろうからである。こう考えたソクラテスは、「国家」を分析して正義の巢を発見する作業に先立って、まず、獵場としての「正しい国家」——そこには当然、「正義」の徳が含み込まれているであろうから——のモデルを言論によって構築する。すなわち、「人間」に理知の座としての頭があるように、「国家」にもこれに相当する部分がある。ここに鎮座するのは王である。「国家」の胸および腹の部分には、戦士階級と商人階級が座を占める。こうした三つの階級に固有の徳は、人間の魂の場合に呼応して、王においては「知恵」、戦士においては「勇気」、商人においては「節制」となるだろう。そうした点を踏まえつつ、では、「正しい国家」——つまりは「現にある国家」でなく「あるべき国家」としての「理想国」——とはいかなる国家をいうのか。その一つとして、われわれは、王たるにふさわしい最も優秀な人間が玉座に就いて統治を行ない、戦士たちはその命に服して守護の仕事に励み、商人たちはかれらの糧を確保するべく生産部門と流通部門に携わって、それぞれが自らに固有の職責を全うする中で、全体の機能の調和も保たれているタイプの国家を挙げることができるだろう。「あるべき国家」の \sim あるべき \sim 性は、国家を構成する三つの階級の「あるべき関係」に求められなくてはならない。当の関係が崩れて、あるいはヒュードラや獅子の身勝手な指揮下に賢者その他が服するという、いわゆる \sim 下克上 \sim が発生したのでは、頼れるコンパスと船頭を欠いた漂流船さながら、国家の前途は暗澹とした闇と考える他はないからである。こうして、われわれはついに、正義の座を求める問いに一つの答えを見出したのだった。

およそ国家は、「王」「戦士」「商人」という三つの階級からなる複合体に他ならず、国家の正しさも、こうした三つの階級の「構成ないし配

列における「正しさ」に帰着する以上、われわれは、国家における正義の座を、国家の内にある「個々の部分ないし階級」にでなく、そうした部分をまさに部分として統括する「全体としての国家」に求めることができるだろう。正義とは、全体としての国家を母体として、この全体としての国家が、自らの特性を最大に発揮している状態を措いてない。すなわち、三つの部分がそれぞれに、その仕事範囲を守りつつ自らの職責を全うして、国家全体が正常かつスムーズに機能している状態——これが正義なのである。今これを、ミクロコスモス（小宇宙）としての人間の魂に置き換えるなら、魂の三住民が、自らの持ちゴマに叶った配置（ヒエラルキー）を保ちつつ、三者がまさに三者ともに自らの機能を発揮して、人間そのものが全体的な健康の内にあることだ、と定義して構わないだろう。ソクラテスは、こうした調和（ハルモニア）としての正義論に立脚し、「正義はそれ自体において得であるか否か」という最初の問いに答えて、「そうだ」と断言した。正義とは、かれによれば、魂の器官ともいべき理知・気概・欲望の三者が、器官としての働きを全うする中で、魂自体が、まさに魂として正常に機能するという文字通りの「魂の健康」に他ならず、こうした「健康」は、それ自体においてきわめて望ましいもの——それゆえ文句のない得——と評価されてよいからである。次いで、ソクラテスは「不正」を分析して、それが、三つの部分相互の「領域侵犯」ないし「内政干渉」に基づくヒエラルキーの乱れ（先にみた「下克上」）に他ならず、身体にたとえるなら、胃のみがあまりに巨大化してその働きを強化したあげく、他の内臓各器官が圧迫され機能不全におちいった結果、身体全体が病気に苦しむケースと同じく、あるいは「気概」の肥大化なり「欲望」の肥大化なりの形をとった、「魂の不健康」ないし「病氣」であると診断した。こうして不正は、「病氣」が本人にとってきわめて厭わしいもの——それゆえ文句のない損——で

あるのと同じく、「それ自体において損」だと結論されたのである。

以上が、プラトンの説く「魂の健康としての正義」論のあらましであった。そこでの要点を押さえるかぎり、これが、バランス主体論の代表格として最初に位置づけられた理由も、あえて繰り返す必要はないだろう。プラトンの正義論は、内なる特定能力の突出した作動よりは、三つの能力のバランスある作動に力点を置いて、部分としての「まっとうさ」でなく全体としての「まっとうさ」に着目した、それゆえ、健康を基本イメージに仰いだ正義論であったからである。ここでは、理知も、気概も、欲望も、ともに生来の持ち駒と定位され、活用されるべき所という点で一切の差をもたない。三者の存在上の是非でなく、まさに活用上の是非を問うプラトンの姿勢は、『パイドロス』（二四六A—B）において、人間の魂を「一台の馬車」に準える形でも端的に表明されている。われわれの魂は、これに従うなら、荒々しく粗野で大きな悍馬（＝欲望）と大人しく毛並みも良い小ぶりの駿馬（＝気概）に牽引され、これを練る御者（＝理知）に導かれた馬車に異ならない。馬車は、悍馬と駿馬と御者の複合体であり、三者のいずれを欠いても、馬車として成立しない。三者ともに不可欠条件（*sine qua non*）として存在自体が是なのである。三者はしかし、互いに存在上は是であつても、人に応じて、個々のサイズや性能に差があるのは否めない。悍馬があまりに巨大で、駿馬と御者を引き回す場合もあれば、御者の腕は超一流なのに、悍馬も駿馬もあまりに小粒で、ろくなスピードが出ない場合も当然にある。前者なら、馬車自体は迷走して転覆の憂き目を味わうだろうし、後者なら、さすがに転覆はないものの、馬車としての本来の機能をおよそ發揮できないのである。牽引部門の性能（悍馬、駿馬）と操縦部門の力量（御者）は、乗り物（馬車）が「乗り物」であるための両輪として、そのバランスが崩れると、まともな走行も当然ながらおぼつかない。先にみ

た「魂の健康としての正義」は、この場合、両輪のバランスに支えられた「馬車のまっとうな走行」に置き換えられてよいだろう。走行のまっとうさは、馬車を構成する理知・気概・欲望の、いずれかの突出でなく、三者とも有機的な組み合わせ（と機能的な連関）につまりは依拠したからである。

おわりに

道徳における表層・深層に及んだ二重のメッセージをやや具体的に紹介し終わって、どうしたわけか、東洋における墨絵の姿が頭にチラついて離れない。西洋の油絵では、キャンバスに多彩な絵の具を幾重にも塗り重ね、およそ塗られぬ部分のない仕方、諸々の対象が描き出されていくのだが、墨絵ではしかし、墨のみの濃淡に訴えつつ、生地（白紙）も絵の内に取り込んで、諸々の対象が描き出されていく。そこでは、墨を用いた部分と用いない部分が、ともに絵の全体を平等に形造っている。前者は、後者に活かされてはじめて部分となり、後者も、およそ部分であろうとすれば、前者を欠くわけにはいかない。一方のみでは、墨絵が成立しないのである。ここにみた「墨絵全体」と「墨の部分」と「生地部分」の三者関係は、これまでに紹介してきた「人生そのもの」と「ネガの姿勢」と「ポジの姿勢」の三者関係を、かなり精妙に象徴しているにちがいない。

あまりに墨の部分が強調されすぎたり、その大半を覆ったりすれば、絵の全体も黒ずんで、墨絵に固有の魅力をあらかた失わざるを得ないし、逆に、あまりに生地部分が強調されすぎたり、その大半を覆ったのであれば、絵の全体も生地さながら、やはり墨絵に固有の魅力をあらかた失わざるを得ない。ともに墨絵としては、下の下なのである。ここで

今、われわれの人生を「大きな墨絵（あるいは大文字の墨絵）」と位置づけるなら、絵画の世界における本来の墨絵としての「小さな墨絵（あるいは小文字の墨絵）」にみられた両部分のバランスに配慮する芸術の汗と同じく、現実の世界における「大きな墨絵」でも、やはり両姿勢のバランスに配慮する人生の汗が——はるかに真剣に——流されてしかるべきである。個々人は、大なり小なり墨絵画家の世界に生きていて、人生という壮大な墨絵を、それぞれの力量に合わせて、できるだけ墨絵にふさわしく仕上げるように、当の人生から委託されているのだ、と想像の翼を飛ばたかせてよいからである。世の道徳がアピールする表層・深層に及んだ中身そのものも、つまりは、画家に生まれた以上、人前に出して恥ずかしくない作品だけは心掛けるようにと各人の耳に囁きかける、老婆心に溢れた人生からのアドバイスと考えてよいのかもしれない。

注

- ① この部分の詳細については、村島義彦「道徳」（『教育学の根本問題』ミネルヴァ書房、二〇〇六年、の第三章）を参照のこと。
- ② たとえば『新英和中辞典・第六版』（研究社）の「reflection」の項。
- ③ 自足は、一般次元では、足るを知るといった意味で、飽くを知らない、貪りの対極に据えられがちだけれども、少し視点をズラせて、禅寺の庭に置かれた意味を斟酌しつつ、般若心経にいう「色即空、空即色」に結び付けて解釈したなら、これ自体、「すべての事象（色）は空と呼ぶ以外にない大元のメタモルフォーゼであって、この色を離れて外に空はないのだ」という禅的な悟りに立った、それゆえ、「今の状況に加えるのも差し引くのも無用」であり、「このままで十分」という無二の安心立命の心境を象徴するとも、あるいは理解できるかもしれない。ここではしかし、世間の通説にならって、あえて一般次元に

解することにした。

④ 『高坂正顕著作集第六卷（教育哲学）』理想社、昭和四五年、の第二部・第四章「功利主義の教育とミル父子の実験」一六七―一六八頁。

⑤ この部分の展開（と依拠した文献）については、村島義彦「正義」

（前掲書、ミネルヴァ書房、の第四章）を参照のこと。

（本学文学部教授）